

現代短歌における色彩語の用法

Color Terms in Contemporary *Tanka*井上 陽子
近江源太郎Yoko Inoue
Gentarow Ohmi女子美術大学
女子美術大学JOSHIBI University of Art and Design
JOSHIBI University of Art and Design

キーワード：色名，基本色彩語，短歌

keywords：color name， basic color term， tanka
(Japanese poetry)

1 はじめに

本論では，現代短歌にどのような色彩語が，どのような頻度で用いられているかを検討した。

このような研究のひとつの流れは，文章心理学にある。波多野完治，コバヤシヒデオ，木村俊夫，安本美典らは文学作品における色彩語の用いられ方を計量的に確認して，文体の特徴を知る手がかりにしようと試みた。たとえば，色彩語の使用頻度は個人差が大きいこと，比喩的表現の頻度と相關すること，ポリア=エゲンベルガー分布に近いこと，などは広く知られている。また，国文学の世界では，たとえば伊原昭など万葉集以来の詩歌に登場する色彩語を克明にリストアップして，色彩語の成立過程を知る，あるいは作品鑑賞の一助としようとする研究も多い。

また，Berlin=Kayの基本色彩語理論などの視点からいえば，日本語における基本的な色彩語を求めるための手がかりともなろう。基本色彩語の基準のひとつとして，彼らは「使用頻度が高く，一般的であること」をあげている。

以下では，現代短歌における色彩語使用の特徴を整理するとともに，基本色彩語理論の視点からそれを分析する。

2 方法

2.1 対象とした資料

岡部桂一郎他監修『現代短歌全集 第17巻』（2002 筑摩書房）を調査対象とした。同書には，1980年以降1988年までに出版された歌集23点が収録されている。短歌総数は9,065首であり，最多850首，最少271首，平均394.13首である。

2.2 色彩語の抽出

色彩語として抽出した基準は，次による。

① JIS Z 8102：2001『物体色の色名』には，慣用色名として合計269語が収められている。内訳は「色名1」の漢字ないし平仮名表記で，いわゆる和色名にあたるものが147語，「色名2」の片仮名表記で，いわゆる洋色名にあたるものが122語である。まず，これらに一致する語を抽出した。

② 上記①の「色名1」には，とき色，つつじ色などと“色”が付されたものが多い。しかし，そのうちには“色”の文字をはずして色を指示する場合がある。たとえば紅色，茜色などは“紅”“茜”で色を指示する。したがって，慣用色名のうち“色”の文字をはずした語も一応抽出した。けれども，そのうちには明らかに色を指示しない例が多く，それらはのちに除外した。たとえば“水”“空”“土”“草”などで色を指示することはない。

③ JIS慣用色名に含まれていない語。このなかには2つのタイプがみられた。第1は，JISに含まれないけれども色名辞典などには採録されている語，第2は“色”を付した語である。たとえば醤油色，海色，米粒色などであり，新造語と思われるものも多いが，一応色彩語に含めた。

3 結果と考察

3.1 色彩語を含む和歌

総9,065首のうち1,713首，つまり18.9%に色彩語が含まれていた。ほぼ5首強に1首の割合である。出現率最少の歌集は『渚の日日』（島田修二1983）の9.41%であり，最多の歌集は『秋照』（武川忠一1981）の34.9%であった。

ちなみに，木村俊夫の報告（1958）によれば，色彩語を愛用した詩人である北原白秋の和歌では25%，与謝野晶子の18%，正岡子規の11%，石川啄木の8%などがある。これらと比較すると，

今回のデータのうち『秋照』の 34.9%は突出しているようにみえる。しかし、特定の 1 歌集をとりあげると晶子で 43%, 白秋で 32%などの例がある。したがって、ここでとりあげた 23 歌集に共通した特異性があるとはいえない。ただ、色彩語の使用頻度は、歌集によってかなり異なるとはいえよう。

3.2 色彩語の種類数

歌集ごとに何種類の色彩語が用いられているかをみると、平均 17.5 種、最多歌集で 24 種、最少歌集で 8 種であった。ちなみに最少であった『無援の抒情』(道浦母都子 1980) で登場するのは赤・橙・黄・青・白・黒・血の色・銀鼠色である。また、使用色彩語数と種類数とはある程度相関するけれども、例外もある。たとえば『秋照』は色彩語使用率は高いけれども、特定の色彩語(赤・青・白)が反復使用される。

なお、23 歌集での合計種類数は 101 であった。このうちにはミルクキャラメル色、梅干し色、虹色、ハッカ色、米粒色なども含まれる。

3.3 色系別の特徴

色彩語ごとの頻度をみると、白が飛び離れて多く、以下青、赤、紅、黒、黄、紫と続く。

これを色系別に整理すると表 1 のようになる。系統分類の基準として、マンセルの三属性あるいは JIS の系統色名区分を用いることも考えられる。しかし、短歌に用いられている色彩語が指示する色域はかなり広いはずであるし、ピンクを 2.5R としてボルドーと同一とみなす、茶色を「暗い灰みの黄赤」とすることは、言語世界から遊離し過ぎると考えて、ISCC-NBS や日本色彩研究所式の系統色名法に準じて分類した。特徴としては、次の点があげられる。①赤系、青系、無彩色系(特に白)が多い。②赤系では、赤と紅とが拮抗あるいは共存する。③青系の色彩語が多様である。

表 1 色系別の出現傾向

分類 (頻度)	種類数	上位出現色彩語及び頻度
赤系 (350)	8	赤 12.5, 紅 122, 朱 45, 茜 31, 緋 20
ピンク系 (11)	6	桃色 4, ピンク 2, とき色 2
橙系 (12)	4	オレンジ 6, 橙 4
黄系 (94)	6	黄 88, レモン色 2
緑系 (108)	9	緑 91, 黄緑 5
青系 (343)	23	青 222, 蒼 49, 紺 12, 碧 10, 藍 8, 水色 8
紫系 (60)	6	紫 52
茶系 (14)	9	褐色 4, 蔦色 2, 飴色 2
無彩色系 (589)	9	白 471, 黒 109, 灰色 3
その他 (103)	21	銀色 46, 金色 19, ~色 19

3.4 Berlin=Kay 理論からの特徴

基本 11 色彩語とその進化過程に、上記の出現頻度をあてはめてみると、現代短歌における色彩語の用法には、次の特徴がうかがえる(図 1)。

① 進化の第 5 段階までの 6 カテゴリに相当する色彩語は使用頻度が高い。

② ①のうち Red には、上述のように赤と紅とが共存する。

③ ①のうち、青は grue であり、green を含む。しかし、俳句の季語の場合ほど green に相当する用例が多いわけではなく、blue を指示する例も多い。緑の頻度が季語にくらべて多い点も併せて考えれば、現代短歌では grue がかなり減少しているように推測される。

④ Brown に相当する色彩語が乏しい。茶色は 1 度も使用されず、伝統的な語である褐色がわずか 4 回登場したのみである。

⑤ 第 7 段階に相当する語は、紫を除いて使用頻度が著しく低い。基本色彩語の視点からみた場合、紫は第 7 段階に位置するにもかかわらず、現代日本人の色名想起調査、文章中の使用頻度調査においても高い出現率を示す。紫の優位は現代日本語のひとつの特徴といえよう。

White 白 471	Red 赤 125 紅 122	Green 緑 91	Blue 青 222 蒼 49	Brown 褐色 4	Purple 紫 52
Black 黒 109		Yellow 黄 88			Pink 桃色 4 ピンク 2
					Orange オレンジ 6 橙 4
					Gray 灰色 3
段階 1	2	3, 4	5	6	7

図 1 Berlin=Kay の図式からみた代表色と出現頻度

以上のように、現代短歌における色彩語は比較的単純な特徴に要約できそうである。今後は、より古い時代での用法と比較して、日本語における色彩語の推移の特徴を考察したい。